

—昭和二十一年

石見ゆる闇に鶴のかげ走りけり 近藤 一鴻

幽玄、典雅な趣の墨色の濃淡に、繊細な神経が通っていて、自然界の微妙に心を通わす作者の静かな感受の研えを感じることができる。作者は林火先生が神奈川県立商工実習学校に教鞭をとった初期の教え子。敗戦により朝鮮（総督府勤務）より帰国、第二号に巻頭。以後岐阜にあり、「貝寄風」を主宰、後進の指導に当たっている。岐阜県民生部長を最後に職を退いた氏にとって長良川のこの秀作があるのは本懐と思う。近作にある典雅な抒情の原点といつてよい。

雪国に託すわが子の懷手 佐野 俊夫

この年の四月号消息に作者の中国北部からの帰還が報ぜられており、翌号この句の一連が巻頭を占めている。北上河畔に疎開の吾子を詠ったもので、若き父情が、抑えた表現のうしろから溢れている。この別れ際の親子無言の対峙は、紺緋筒つば、雪沓をはいた男子の姿が想像さ

れ、その懷手はいかにも可憐である。

—昭和二十二年

早く世が美しかれ冬の鶴歩む 堀 喬人

この句を読むと、まぎまぎと戦後荒廃の世相を思い出す。街中に残った小公園にふと見出した鶴だったのか。しかも荒涼さをなお加えんとする冬景色であってみれば、その端正な鶴の姿は、まさに作者の憧憬する美の世界の象徴でもあったに違いない。読後のわれわれを、ほのぼのと光明の世界に誘ってくれたのである。

—昭和二十三年

狂へるは世かはた我か雪無限 目追 秩父

「貧」と「病」。これとの戦いは秩父の生命の燃焼をかりたてた二つの大きな契機であった。それをエネルギー源にして、全き燃焼をして果てた、それが秩父俳句だといえよう。掲句は勤

め先の労働争議の犠牲となり、職場を追われ失職中の、貧窮のどん底に立った折の作品である。その強い観念の詠出に発表当時からポーズが鼻につくとか、観念露呈とかの賛否が渦巻いたが、真実まぎれもない内奥の叫びは、ストリートにひとの共感を誘うことをやめなかったのである。才気煥発、情熱的で、ダイナミックな、つきあえば男をも惚れさせる魅力に富んだ作者の肉声を聞くおもしろい句である。

炉にゐるや別の己れが北風を行き 松崎鉄之介

昭和十六年入営、歴戦のうち腰部貫通銃創の負傷などを経て、敗戦を満州西部に迎えた作者は、昭和二十二年五月までシベリアに虜囚生活を送りその年舞鶴に帰還した。掲句は帰還して半歳。就転職などあわただしい復員後の生活の中での作である。戦後混沌の内地の世情にまだなじめぬ、虚脱の時間の所産、といえよう。炉にいる自分と別の分身が北風の巷をまだ彷徨っている心理の真実であり、かなしい。原句は「炉の幻覚……」であつたが改めた。見識である。

百合散つて地が炎天と直結す 金子無患子

感覚の句だ。百合が散り視覚の拠り所を失った空間の微妙な真実がある。読後、電流の如く感銘が快く伝わる。白花があたかも天と地のスパークのように散華した炎天界の一コマである。作者は私どもの仲間（昭彦・孝臣・喜代一・竜二等）の中で一番早く頭角を現した。「濱」が一鴻・俊夫・鉄之介・灯京・喬人など戦前より師事した人たちの一群の開花のあと、秩父・節子の気鋭の登場を見、ついで無患子・昭彦等の擡頭となるのである。それは師風に背くかに、抒情的なものを擯斥し、観念的、感覚的、無飾直截な句風が目立つのである。

湖その後むらさき深く枯れにけり 三浦 紀水

作者の出現は「濱」に一異色を加えるものと注目された。一方が現実に即き、いかに生くべきかに懊悩しているとき、紀水は、「現実をとらへて高く心を遊ばせ」（林火評）る浪漫があつた。掲句は、事件的な暗示だけがあり、物語は各自の挿入に任せている。調べと「紫」という色彩言語の理解が物語を一層細密にする。「紫は冷却された赤」（カンディンスキー）の言葉が思ひ出され、色彩効果に比重を置いたこの句の色彩感覚の研えを感じるのである。

霜旦の鷄鳴悲鳴にも似たり
宮津 昭彦
磔像に触り鉄の冷感のほかは受けず
同

本来、雄叫びであるはずの鷄鳴を悲鳴と聞きとめねばならなかったところに、時代を真摯に生きる若者の、感受のかなしきがあった。「如何に生きるか」の命題を中心に据えて、対象を、自分という人間が如何に感じ、どう理解したかを、ものを通して確かめる、といった作句態度を、いつもその基点に立って貫こうとしたところに彼の魅力があるのだ。「磔像」の句にしても、キリストへの帰依信仰の拒否をいっても、それは求道の真摯さがうしろにあるから、単に観念を十七字に嵌め込んだといった空虚さがないのである。

くろがねの秋藻の中に針ひそむ
稻垣法城子

水中秋色である。三浦紀水とは形影添うごとき仲でその影響が見える。紀水の虚無の翳が作品の影りを深めているのと対称的に、華麗な色彩は苦渋の翳などない。楽天的な人柄によるのか、素直な感受による抒情に穏和なやすさが宿っている。

—昭和二十四年

冬の日や臥して見あぐる琴の丈
野澤 節子
春昼の指とどまれば琴も止む
同
春曙何すべくして目覚めけむ
同

いずれもすでに俳壇の評価の定まった代表作。琴は、女の習いごととして、作者も病臥の前に親しんでいたもの。その愛琴にまつわる、思い出を秘めて見上げれば、胸中に、風韻の調べが奏でるのである。抑えて叙し、読者の胸中に起爆力は強い。「春昼」の句は山本健吉による文楽の文五郎が遣う、阿古屋琴賣めの段に譬えた鑑賞が名高い。「春曙」の何すべきことも得ない目覚めとはかなしく痛々しい。だが、ここから目を外らさない勁さ、自己擬視の厳しさは、現象の奥を見きわめる心眼を育てたといつてよい。

どこにゐても蛸の声まつすぐ来る
川島彷徨子

「詩はおどろきだ」とする飛鳥田燦無公の言葉は、彷徨子にも強い影響を与えたといえよう。この年刊行された第一句集『榛の木』は牧歌的なものに即物的なものが加わったことが指摘さ

れている。掲句も、その線上にあり、とらわれぬ感受の純粹性を貫く彷徨子俳句に相應しい。「まつすく来る」は手垢のない感覚であり、しかも「蝸のこゑ」の本意といつてよい程、その特色を射ち貫いている。

早川牛眼を据ゑてにごさず飲む 粟飯原孝臣

渴きを癒す動物のあり様の真実が、迫力となって示されている。そしてさりげなく置かれた「早川」の語が、実はそこに作者の所在を示す大切な一語であつたことをいま感じている。普通の水でなら単なる生體である。早続きに細る流れ、それは当然、灼熱の太陽、その条件の天地を想像する。その下での酷しい労働の時間とともに過ごした作者が、いま渴きの激しさの故に、「濁さず」飲む牛を共感を以て見道るのである。牛を自分と同列に置く愛情はその後も彼のリアルな句の基調にあるようである。

身は北風のつつみ得ぬほどよろこび持つ 染谷 十蒙

岳麓、吉原で医院を開き、その地方の会員の指導もされた十蒙さんに、私も網代のアフタケアの頃一度お世話になつたことがある。その折の隔てない気さくな交わりに、この長老の素朴

純情な人格を識り、この句の背景に背いたのである。よろこびの情を、率直に「北風のつつみ得ぬほど」と具体的、簡明に述べたことで、読者は破顔、祝福を頒ちたい気持ちにさせられる。

天の川奔流もまた光る地上 北村開成蛙

この句と出合つた感動はいまも忘れ難い。若き力がぐんぐん伸びていた時期といつてよい。星空は半球を伏せ、くつきりと銀河を走らせ、地上また奔流が光り呼応する、地平をのぼす雄勁な荒野に大きく呼吸を共にするような浩然の氣が与えられる。まだ早大在学中、北海道の父の許に帰省した折のもの。

—昭和二十五年—

材木の間も淙々と時雨川 田中 灯京

「古格をふまえて現代に通う新しさを蔵している。この材木は河水を利用しての貯木である。その材木の間も時雨を湛えたつめたい川水は淙々と音立てて流れているのである。流るる川音も澄んでいるが、これを聞きとめた作者の心も澄んでいる」これは発表の折の林火先生の評で

ある。篤実の人物を負う句風は、淡い抒情性と、写実に徹して自己と生活を凝視しようとする二つの面を綯い交ぜながら、昭和三十三年、句集『春禽』に結実した。

東京 いづこに行けど寒風と人流れ

松崎鉄之介

いまでも私にとって、東京はどこも人が多すぎてなじめない。人酔いを起こすくらいである。それにしてもこの句にはその違和感がやや深刻である。調べにも、「寒風」とともに捉えることにも、それが窺え、やり切れなさが強く訴えかけてくる。作者はこの前年、大蔵事務官の職を得ており、税務調査のため毎日のように東京の街々を歩いての感慨であった。そうであれば違和感より嫌悪感が強いのは当然といえようか。着実にその生活の翳を負った感懷を洩らすところに誠実な鉄之介の作句態度があると思う。飛躍はないが、人生を歩む一人の人間の姿が確かな實在感を以て迫ってくる。

風も一すぢ林中の雪の径 飯森 杉雨

一本の真つ直な林中の雪道、それを風筋に風も真つ直にやってくる。まさにその人柄にみる一徹、樫の棒の把握である。氣力の充溢した、まさに真つ向唐竹割りである。そして幾たびも読むと、その調べの底に敬虔な作者の態度が見えてくる。誰しも、何事によらず懸命な姿には心打たれるが、杉雨は自然界の緊張にも懸命さを観るところに真面目がある。そしてそれへの共感、感激が、調べに敬虔なものを添わせていると思う。

梅雨清浄葉をひろげゐる樹々の上に 野澤 節子

それまで私が「梅雨」の言葉に抱いていた、鬱陶しいといった固定概念を一挙に解き放ってくれた。この句から、囚われずに自然に対すべき態度を学んだのである。両手を広げるように枝を繁らせた樹々の上に、垂直に雨条がけぶる。それは静かに摂理を受容する自然界の一つの姿として肯かしめるとともに、敬虔な禱りのあとにも似た、澄んだ作者の内面の昇華をもそこに見ることができ、自己凝視の果てに具現した節子浄土といっている。

眼を傷め帰る炎天音におびえ 菊地 竜三

視界を制限されれば聴覚が頼りだ。にわかに病んではそれもままならぬ。警笛はすべて自分に向くかに錯覚する。そうした屈託の心理、陥んだ暗き緊張が伝わる。この「炎天」酷しい現実の象徴として重い。「とうとうと下水が冬の沖めざし」の一句から下水の竜三として擡頭し

た作者は、正攻法に、棒の如き把握の勁さを示す反面、掲句のこまやかな感受も一面であった。

深爪を切つて夜涼にこもりをり 永野 萌生

「濱」初期の萌生の評論面での活躍は多くの影響をその成長に与えたと思う。当時大阪在住の氏は「俳句におけるシンコペーション」の評論などでやはり達意の筆をもつ北野春彦・出雲正明両氏と組んで、「濱」の大阪編集をやつてのけており、忘れ難い人である。作品は静かで穏やかな人柄のように端正で、穏健な抒情だ。掲出の句もそうで、深爪を切った不安定な感情を巧みに「夜涼」の季節感に生かしている。

—昭和二十六年

除夜の湯に肌触れ合へり生くるべし 村越 化石

この年、林火先生はじめての訪問を四月に受け、十月初巻頭と躍進した。そして「生きてゐるよろこびか端居の背かゆし」などを含め、第五回濱賞を獲得している。自句自解に「『生くるべし』の語が私の人生ではじめて、実感され、今日一日を甲斐ある如く生きたいと希った」

とある。浮き上がりがちな観念語「生くるべし」が千鈞の重みを持つことも当然である。

音たてて雪溪解けてゐたりけり 松崎鉄之介

遠く見た山峡の白き雪溪。近づいてみるとそれは音をたてて激しく解けていた。その感動のつよさを、そのままの氣息にこめて詠いあげた句である。乗鞍・上高地旅行での収穫。久しぶりに得た爽快な日日の実感がじかに伝わる豪放な青春句である。この旅の前に婚約しており、この旅の解放感は一層大きなものであったに違いない。

皆夕焼の熱を持ち込む東京駅 金子 篤子

まだ旧姓の田辺篤子時代。神田に服飾デザイナーとして通勤していた折の作品である。退社時のラッシュアワーの群衆に倦意をみず、活気と充溢をみたことに新鮮な印象を受けたことを思い出す。一人一人が夕焼にまみれてホームに集まる姿に夕焼の熱気を感じ取ったのである。そこにはいきいきと活動的な内質が窺える。都会生活の中にナイーブな詩を見出していまに新鮮である。

無花果爛熟冷凍鯨肉なかばとけ

吉野 義子

頽廢の甘味がある。厚塗りの油彩の味。照応する二つの爛熟したものが均衡して漂ってくる香りは強い芳香だが、不思議と腐臭ではない。それは色彩のイメージによると思う。灯京はこの句から中年女性の性意識を受け取っており、嫌味に陥らず純粹な感銘を与えるのは冷徹な態度と激しい情熱の裏付けによると書いている。私には色彩の語りかけを巧妙に組み込んだ手法が新鮮であった。西欧の香りが強い。

あこがえる夕顔白花種の冷え

きくちつねこ

高貴なる浪漫、王朝趣味。純情な官能、耽美の系譜、ナルシズム。彼女に冠せられたこれらの言葉を繋げば、つねこ俳句は語れる。登場後いち早くそうした独自の詩境の完成を持った彼女の作品のはじめにこの句がある。てのひらの夕顔の種子から、刻こえて胸中に白花をひらかしめる。同じ病床の節子が俳句に厳しい自己凝視をし、つねこはここを高く遊ばしめるその違いが面白い。「種の冷え」の「冷え」は「夕顔白花」と照応して宝玉の「冷え」の如く変貌

する効果も巧みである。

夏瘦せの夫婦はげまし合ひにけり

目迫 秩父

白粥を吹きくれる妻晩夏光

同

葉より落つ夏満月の蝸牛

同

「病」との闘いがこの年の爆発を得さしめたのはかなしい。「貧」が変貌を与え、いまは「病」が燃焼を支えている。このころは、号を追って病変の句は深刻となり秩父の病状をたずね合うことから挨拶がはじまった。「夏瘦せの」の句を安住敦が「この調べの間に人間の悲愁を酌みとることができないものは、少くともぼくたちの俳句と縁のない衆生である」と書かれたのは忘れがたい。「白粥を」の句には懸命に看護に尽くしてくれる妻に対する感謝の眼差に、信じあえるものへの心のやすらぎが籠っている。「葉より落つ」の句の夏満月の月光界に充足した均衡を破って落下する蝸牛の発見は、虚脱の速度に身を委ねざるを得ない彼の眼には絶望的な光景であつたに違いない。

(中戸川朝人)

望郷台暮春の頭垂れ登る 村越 化石

はるかに懐かしい故郷を望むのに、「頭垂れ登る」とは哀切である。この「垂れ」の二字には万斛の思いが籠る。この句は、草津楽泉園に住む作者が、東京の多摩全生園を訪れ、そこに数日滞在した時の作である。作者によれば、この「望郷台」は、昔の患者たちが自らの手で土を盛り丘を築いて造り上げたものだという。そうした同病の人たちの、いじらしく切ない気持ちを自らの気持ちとして、作者はその「望郷台」に登ったのである。そして去来する思いの深さに頭を垂れたのである。「暮春」が効果的だ。

水害の記事の余白の白きこと 杉本 寛

水害という悲惨荒寥とした記事に心を痛めた作者に、その余白の白さが衝撃を与えたのである。しらじらとした空白部分が、作者の歎きを一段と強めたのだ。この年、日本は水害・台風の暴威にさんさん傷めつけられた。杉本氏の作の他、「濱」誌上にも、梅雨期の出水禍、九月の台風被害に関する作が多く見られた。

浅間夜寒切子の如き灯の障子 中澤文次郎

縦横の棧に区切られた障子の一駒—こまが灯に浮き出たさまを、切子灯籠のようだというたのである。「浅間夜寒」の語が、やや冷たい空気の澄みを感じさせ、灯に映えた障子をことのほか美しく浮き立たせている。

待みるし春来ぬ夏を待みはじむ 増田 達治

期待していた春がめぐっては来たが、すでに自らの意の充つることあたわず、はやくも次の夏を待み始めるというのである。常に期待を裏切られ、しかもなお未来に希望をつなこうとする作者の真摯な生活態度が窺われる作である。達治作品のなよりの魅力は、崩れがちな自らの心を自ら鼓舞し叱咤しながら、せいっぱい生き抜いていこうとする庶民の誠実さがにじみ出ているところである。そしてその間々に、生得のものとと思われる心情の優しさがのぞいて見えるところである。

甕に入れ雪夜の水の自在奪ふ

宮津 昭彦

擬人法は、宮津氏の有力な修辭法の一つである。三十年当時と現在（昭和四十五年）とでは、かなり顕著な作風の変化を指摘することができるが、擬人法の活用といった点は今も往時も変わらず続いている宮津氏の特徴である。そうした中で、掲句はその代表作例といふことができる。自句自解で宮津氏は、「擬人化や比喩の使用など、このころから意識的に模索し始めたように思う」と書いている。

暑くなると朝の漁夫らの荒き言葉

近藤馬込子

漁夫の姿体、漁港の有様が彷彿としてくる句である。「荒き言葉」がいきいきと聞こえてくる。生気ある句だ。この句は、伊豆戸田における第一回鍛錬会の時の作で、作者はこの句を含む五句により、鍛錬会賞を得ている。

孜々と編む毛糸もて世につながるのみ

梅田 房子

日々毛糸を編み縫いで暮らしている一人の女性の生活がよく描かれている。この句にみられる通り、房子さんは当時、毛糸編みをたつきの業としていた。そしてその自己の仕事と生活とを見据えて、念力の籠った秀作を数多く生み出した。

火消壺火を呑み膨る野分かな

福井 草以

真つ赤な炭火を蔵することによって、この火消壺と外の野分との間に一種の緊張感が生まれている。「膨る」の語が効果的だ。作者は舞鶴在住の古い作家。地味な人だが、私の敬愛する作家の一人である。

喜雨のしぶきかかる柱を牛舐る

大熊 輝一

喜雨到米の喜びが一句に横溢している。生氣躍動せる作である。この句、特別作品「喜雨前後」の中の一句だが、同時作には実際に農業に携わっている人でなければできない佳句が並んでいた。大熊氏の作品には、人柄の真面目さそのまま、全く銜ったところがみられない。

日本のうたごゑしらぬ一節さむく過ぐ

中戸川朝人

ロランけふも幾人の凍てし身に棲みし

同

前句には「日本のうたごゑにて」という前書があり、後句には「ロマン・ロラン研究会にて」という前書がある。これらの作には、一種爽快な感銘がある。流動的な時代相に鋭敏に反応しつつ、自らの思想形成にすぐれて意志的であった一人の人間の若々しい姿勢が遺憾なく現れている。真実を求めて前向きに生きていくこうとする作者の青春像が鮮明に表出されており、この精神の昂揚は美しく尊い。昭和二十年から二十七年までの短からぬ療養生活を見事克服して社会復帰した氏にとって、この昭和三十一年という年は心身共に充実した年であったようだ。

径引入れからまつ無限の霧霰

村越 化石

清澄な空気と精彩を放つからまつ霧しずく。新鮮にして無窮なる自然の美しさを感じさせ

る作である。どこまでもつづく霧しずくにうつとりとしている作者が見えてくるようだ。「無限の」といったところに、作者の自然に対する敬慕のごときものもみることができ。

——昭和三十二年

野焼く煙太陽もまた一火焰

田中 灯京

スケールが大きく、氣力の張った作である。「太陽もまた一火焰」と、一気に淀みなくいい下したところが力強い。田中灯京氏は、実作とともに評論をよくし、その整然とした論旨と明快な主張には私などずいぶん裨益するところが大きかった。

銀河濃く城羽ばたかんばかりなり

城 佑三

銀河の下、屋根を張った天守閣の姿が、まさに夜天に翔びたたんとする大白鳥のごとく見えただのである。ロマンをたたえた詩情豊かな作だ。

海に死なぬ家なく漁村梅を干す 八牧美喜子

「海に死なぬ家なく」が哀切である。そうした悲しい事実をひめながら、なお生活のために海へ出ていかねばならぬ漁村の悲しさが、「梅を干す」という日常的行為の奥に透けて見える。生来病弱と聞くこの人が、鍛錬会や関西吟行会に加わっているのを見ると何かほっとした気持ちになる。近作には病みがちに生を送る人の何か切ない執心のごときものがうかがえる。

銀タンク塗りあがる地にクリスマス 新村 青幹

青幹氏は「石楠」時代からのベテラン。数種の職を経て後の職、ペンキ塗装業を詠ったものに佳作が多い。掲句は、クリスマスの頃の浮き浮きした雰囲気の中で自らの仕事を黙々と成し遂げる者の自足と哀愁がよく表現されている。

嘶きもらし吹雪の貨車に馬色暮る 金丸 鐵蕉

国鉄に勤務する金丸氏は「貨車」その他鉄道に関する題材を得意とする。嘶きつつ暮れてい

く馬は哀れをさそう。吹きつける雪の中であるだけに一層そうである。狭い貨車の中で身動きもならず、この馬はただ悲鳴の如く嘶きもらすだけなのだ。

——昭和三十三年

月下の瀬光の蝶をあげつつく 川島彷徨子

唯美的な作である。月光に照らされて、瀬の水がきらきらと光り連なっているのである。それを、「光の蝶をあげつつく」といったのは素晴らしい飛躍であり、清新な比喻である。この句は、視覚に訴えて来るのみならず、聴覚をも刺激して来る。瀬の音が句の裏側でリズムを形成しているのである。この句を読んで私たちが味わう美的快感は、この句の動的であり、音楽的であることによって、一段と大きなものとなっているのだ。作者の美意識が鮮麗に示されている作であるということができよう。

一馬 身影逸らせて 櫓馬は 村上一葉子

斜め後方から陽をうけて疾走する馬の姿態が躍如としている。速度感あふるる秀作だ。一馬

身先行する己の影と相競うごとく疾走する馬の躍動感を素速く捉えた作者の手腕は高く評価されてよい。

いま生れて土筆のごとき脚の馬 森田 博

林火先生は「森田博君の作品はたとえば幼児の自由画を見るように自由であり、且つゆたかだ」といつておられる。森田氏の柔軟にしてナイーヴな作品群は人々を瞠目させた。森田氏の生得の詩質のよろしきは遺憾なく発揮された。自由闊達な佳作が次々に生み出された。

雪とべり道の下みなからまつ 村上一葉子

村上一葉子・武良山生氏たちが、自己の棲む風土へ深い切り込みを見せ、一時期を画したことは記憶に新しい。風土発掘への異常な情熱が数々の秀作を生ましめたのだ。上掲作は、大日向開拓地での作である。一葉子氏の作家魂をうかがわせる。

— 昭和三十四年

行春のわが佇つ砂丘風に瘦す 羽部 洞然

飯森杉雨・羽部洞然・大石白夢の三氏を「清水三人衆」というそうであるが、「濱」昭和三十四年五月号には、この三人衆が仲良く特別作品「遠州砂丘」を並べて発表している。この句はその中の一句である。「風に瘦す」に逝く春を惜しむせつなさが出ているであろうか。

夜蛙にねむる種牛精溜めつ 荒井 正隆

この頃は正隆句業の一つの峯を形成する時期である。荒井氏は、修練のわざを思わせる秀作をよく示すが、この句は正面から力で押して来るような作である。気力充分といった感じの迫力がある。

—昭和三十五年

母の日の林檎摘花母に降らす

武良 山生

幸福感のあふるる句である。青天の下、白い林檎の花を、子はたわむれに母に降らせたのであろうか。それをもって母の日の祝意としたのであろうか。この和氣藹藹たる母子像に祝福あれ、と作者も願ったことに違いない。林火先生は「三十五年は山生俳句成長のときである」といつておられる。一葉子氏とともに風土発掘に打ち込み、山国の風物と生活を描くのに余念のなかった時期である。

紙魚を追ひ癩文学の端負へり

山本よ志朗

林火先生は座談会で「自分を考える上に大いに役立ったものは草津楽泉園の諸君と面したことだ。化石君たちと接したのは二十六年か七年だが彼等とともに人生を考えたことだ」「どん底の所でお互いに手を結ぶということの純粹さ。大事さ。そんなことがあそここの俳句の熱氣にもなった」と述懐しておられる。山本氏の「癩文学の端負へり」という自負も、そうした中で育まれてきたものであろう。宿命は宿命として背負いこんで、そこから動く生きていこうとする

る決意が一句の底にはある。

楮むく女力ぐいと引きぐいと引き

川村 紫陽

私もかつて「瀆」富士支部の人たちと一緒に楮を蒸す所を見に行ったことがあるが、「女力ぐいと引きぐいと引き」の迫力は、その時の皮剥ぎの光景を目前に彷彿せしむるに十分だ。「楮」の句の代表作として推すをはばからぬ秀作である。

—昭和三十六年

西瓜ぎつしり安いと言はんばかりの灯

鈴木 達弥

達弥氏は、前記川村紫陽氏と同じ富士支部の人で、行動力抜群の好青年である。この句のいかにも庶民的で親しみぶかい措辞は、作者の人柄をそのまま表しているといえよう。山積の西瓜の上で、この「灯」は、安いよ安いよと呼びかけるように輝いているのである。自由奔放な捉え方であり、明るく親しみ易い作である。

桃を吸ふ密教の地にしたたらし 恩賀とみ子

「高野山にて」の前書がある。桃を食べながらその果汁をこぼす、という行為が、そこが密教の地であると思うことによつて、俄かに強く意識されてきたのである。しかし作者はそのままだやや背理めいた所作を押し通すことによつていささか悪念ぶつてゐるのである。「吸ふ」といい「したたらし」と敢えていったところに作者の自我を垣間見ることができるよう思う。

屋上去る孤島を日永にのこすごとく 宮津 昭彦

「孤島」という言葉の幹旋に疎外意識があるが、宮津氏らしさを感じさせるほどのことはない。都会の喧噪の中にあつて、人影のない「屋上」を「孤島」とみなす感性はすでに凡ではないが、宮津氏らしい体臭が濃厚に示されるのは、「日永にのこすごとく」というところである。「孤島」を、炎熱の下に灼き尽くすでもなく、寒風の中に晒し凍らせしむるでもなく、なまぬるい春光のなかに「のこす」といったところに、当時の宮津氏のある時の心象が定着されている。無意味な持続性、営為の無目的性、といったものをこの「日永にのこす」は負っている。

盲ばかりゆれあふ一車ほととぎす 天野 武雄

この句には「県盲総会に招かれ初出席、総会の諸氏と同乗四万温泉に行く」という前書がある。「ゆれあふ一車ほととぎす」に作者は心弾む喜びの情を託したのであつたかもしれない。初めての大会出席であつてみれば、作者に期待と興奮があつて当然である。だが作者が思わずも、「盲ばかり」と置いた瞬間、この句は変貌してしまつたのである。作者の思いを呑みこんで一人歩きしはじめてしまつたのである。この句は妙に私の頭にこびりついて離れぬ作だ。楽しさや哀しさを通りこした底の深さを感じさせる作だ。

(大串 章)

一羽づつ 柚夜遊びへ満つる月 山田 蓉子

柚を「一羽づつ」ととらえたところが眼目であり、柚の軽妙な動作と、鞍馬山の物語の世界を現出させた。山を昼のように明るくする大きな月を「満つる月」とした表現にも効果がある。人は月に誘われ、夢幻の中に遊ぶ。ここから物語が始まるのである。現実と幻想の間の妖しき世界である。

鬼やんま蠅食ひに来る炉に帰省 鹿山 隆濤

公務傷害により半生を病院生活を余儀なくさせられている人である。したがって年に一、二度の生家での外泊は少年のように心が弾むのに違いない。生家をなつかしむ心の弾みがよく出ている。やんまは自在に炉端まで入って来る。勿論この炉端からは戸外の田畑が見通され涼風も通って来る。この炉端は、作者をあたたく迎えての談笑の場であつたろう。

信濃びと曲れば術なし雪降り積む 溝口 青於

長い闘病生活から解き放たれ、他郷で仕事を始めた作者の仕事にかけた意志、なんとかやりとげねばという気魄。他国ものとしてなかなか理解せず、胸襟を閉じ、受け入れようもしない淋しさ、その意固地さに梃子搦っている姿がある。実生活でこうした場に何度ぶつかったことだろう。ほっと溜息をつきながらも、ここで立ち止まってはならぬ、と心をひきしめている、バネ力がよみ取れる。

春暁をまだ胎内の眠たさに 野澤 節子

「わが誕生日に」の前書のある句。うつらうつらとした駢蕩の気分が快い。「胎内の眠たさ」とは、詩心の飛躍が美事である。ほのあたたかい春の暁、床の中で現と夢の間をさまよっている。うつらうつらとした快い気分、それを羊水の中にあるものと飛躍させたところがうまい。

——昭和三十七年

なでてやる馬汗菩薩塵菩薩 岡野風痕子

労働の象徴である「汗」「塵」の語の重ねに、馬への深い愛情が刻まれている。夏の一日、ともに働いた馬へねぎらいの言葉をかけながらなでてやるのである。馬もまたじつと気持ちよさそうに目を細めていたろう。馬を大事に扱っている心の通いあいが出ている。これは外部からみているのではない強さである。

甕の水汲めば灯が割れ雪の家

小原 俊一

特別作品「木曾」の中の一句である。木曾の生活を執拗に目を働かせて詠い、すぐれた作品を示した。何をさぐるか、何を詠うかというのではなく、自己の生活を詠うことがとりもなおさず木曾の風土なのだという姿勢であった。省略された表現に、厳しい冬の山中の限られた、わびしい生活がひろがつて来る。

さみしからず寒菊も黄を寄せ合へば

目追 秩父

淋しき、人恋しきが痛いほどに感じられる。気分がすぐれなかった時のものであろうか。氣力を張って闘病生活を続け何度も危機を脱して来た人にしては珍しい、衰えさへ句にうかがわれる。三月十八日払暁咯血死。五月号で林火先生は「寒むや死に抗しつづけし薄屍」「百千鳥柩の汝を運ぶ上」と悼句を贈っている。病重い作者にとっては俳句に支えられての生であつたに違いない。

はじめての雪闇に降り闇にやむ

野澤 節子

「闇に降り闇にやむ」に、初雪のういういしき、はじらいがいいとめられて見事である。初雪はだれでも詠うが、その降り様を直截に詠ったものは少ない。その新鮮さが、より人の感動を呼ぶのである。初雪とせず、「はじめての雪」とふくらみを持たせた表現の配慮もいわねばならない。雪と作者の秘かなめぐりあい、それへの愛惜の念が出ている。

綻ぶや雪百日の傷桜 西村 公鳳

厳しい冬の、重く美しい雪の中でじつと耐え、咲くべき時を忘れずに咲き初めた桜への讃美、待ち望んだ春を迎えるよろこびが出ている。対象へのあたたかな目差しを感じる。私はこの句に、人間の生きて来た道程を重ねて味わっている。風雪に耐えて一つの充足を得た姿である。それは北陸という風土にかかわる作者の姿といえる。

夜泣き子に燃え移らんと炉火赤し

木附沢麦青

「燃え移らんと」がこの句のポイントであり、焰の威力を捉え炉火を印象的なものとしている。赤子は何におびえてか、なだめても泣きやまぬ。親はただおろおろするばかりである。泣き声をあおるように炉火は盛んである。志賀直哉に、赤子の夢泣きに親の無力さを感じている描写があるが、正にそれである。異様な空気が出ている。雪ふかい北国の炉辺のさまが捉えられている。

竈酔の膝折つて吸ふ雪の風

木附沢麦青

ふだんは厳しい雪の風も、時には焼子を蘇生させる風となるのだ。北辺の生活のきびしさ、かなしさが出ている句である。彼は「都会中心的文化に取り残された僻村の暗い生活と、その中からちよくちよく顔を出している意外に健康な農民とか村人の営みに強くひかれています」(「北辺鼎談」)と述べているように、北辺の生活にくさびを入れ、一筋の道をぐいぐいと力強く押し進め、執拗に新しい題材を追求、佳句を残した。

神の森ありて深雪に道生る

白井春星子

深雪の上にはつきりと道ができている。それは神の森へ通じる道なのである。この森を人々は精神の拠り所に行っているのである。神につながっているが故に日々安寧に暮らせるのである。仕方がないからではない。今ある生を大事にするという覚悟からの、土地にしっかりと足をおろし、定着して生きる姿がうかがわれる。

夜の秋湯浴みの僧の膚白し

久保 龍

しんかんとした禪寺の、ひんやりとした夜気がただよう。この僧は学僧であろう。業務からときはなたれ、入浴にほっとした時を得ているのである。僧の肌身の美しさは、仏身のごとく清らかであったろう。「夜の秋」がうまい。この人は、ユーモアを解し、いつも身近にいる人々たちを笑わせている。その洒落な性格が人の見つけ得ない句材を得させたのである。

ふと絵踏の怕き牡丹の弁跨ぐ 滝本魚顔女

連想豊かな句であり、感銘を今また新たにした。また有名な「ためさるる日」の絵も再び浮かび上がる。散った牡丹の花弁を跨ぐ時、ふっと絵踏みのことが連想された。キリスト像の彫られた銅板を前にしての宗徒のためらいと、幕府権力への怖れが、作者の脳裏にあざやかに浮かぶ。散っても牡丹は作者の心をびりつとさせるほどけだかいのだ。花の貫録である。この人の出現はまさに彗星のごとくであった。男性的な線の太さが特色であり、ものをぶつつけた強さである。巧みな連想力飛躍力は学ぶべきものが多い。それは過去に培われた教養の豊かさによるものであらう。

青き勾玉ならむ水輪のなかの冬 櫛原希伊子

美しい。おとぎの世界に誘われる。作者は周回はずけさに陶醉し立ちつくしている。湖には波紋が徐々にひろがって行く、青が消えることなく。林火先生は色彩の豊かな作家であるが、この作者も色彩、とくに寒色の句の巧みな人だと、私はひそかに思っている。俳句に入る前は

詩作に熱中していたというだけに、詩藻、連想の豊かさがこの人の武器である。

冬深む息つめてわが影の黒 櫛原希伊子

厳しい寒さが、自分の影の小さく縮んだ黒さにあると感じ取ったのである。「黒」で統一したことはしゃれた感覚だ。息苦しうにじつと耐えている縮んだ影。「黒」と見据えたことで、作者の意志が明確に定着している。即物の大事さを教ええられる。

鳥雲に浴後さみしき土不踏 黒古 フク

女性らしい細やかな心遣いがある。浴後さっぱりした気分とは無関係のように、土不踏だけが忘れられたような感じなのである。潔められているだけに何かさびしいのである。一種の春愁である。帰る鳥が遥かな雲間にかくれゆくさびしさと、土不踏の存在のさびしさに照応させた取り合わせはうまい。ここに作者の心遣いを感じるのである。林火先生は「俳句は多かれ少かれ『私』にかかわるものだが黒古さんの句はそうした中で際立って私小説である」と述べている。読後、凜と張ったいさぎよさが快いのは、病後の心の気負いであり、一筋につながる覚悟の強さからであらう。

忘れろし平安深く耕せば

増田 達治

作者の心境句である。表面は農耕を離れていた者が、再び鋤を持ち畑を耕したときの安堵感、遠く忘れ去っていた農民のよろこびがよみがえって来た、ということであろうが、作者自身、過去の苦勞を経ての平安、やすらぎを今得ているには違いない。この平安を少しでも長く大事にしたいと、かみしめ楽しんでゐる姿がある。

農に生れ長じて小吏秋裕

猿橋統流子

白髪、長身、微笑をうかべた顔は温厚、誠実な人柄をさながらに伝える。農へ向けた彼の眼はあたたかい。この温かさはこの句に詠ったように、この人の生立ちに素因がある。親近感、心の通い合う体験があるからである。名利や富にあくせくすることも考えず、ただあたり前の道をあたりまえにこつこつと着実に歩む純朴な人の姿である。

——昭和四十一年

闘牛の闘ひしあと椿に吼ゆ

小熊 一人

八丈島五句のうちの一句である。「闘牛」と「椿」のあしらいが巧い。この椿は樹齢も相当な古木に違いない。牛は闘いに勝ち、あたりのものを威圧するようにかちどきを挙げ吼えたのである。その豪快な吼声に応えるごとく、真紅の花を咲かせ椿は立っている。たくましい野性美が捉えられている。この人は豪快で実行力に富んでいる。おそらく氣に入った題材には迫力をもつて食い下がり、何時間でも立ち尽くすタイプであろう。

春来れば旅恋ふ安住の家なるに

吉田 幸子

この人は下町のおかみさんといったタイプの人柄で親しみがある。やさしさ、温かさは金沢の生まれで、親鸞上人への帰依の深さから来るものである。この人は仏教に関する句が巧い。それ程素養が深いのだ。「春来れば」の句は平安にありながら旅を恋い、心を動かす自分を煩惱のなせるわざと自嘲している姿が出ている。

サングラスかけてしづまる巖・怒濤 金子 篤子

この句は鳥取移住一年程経た時のものである。生活を重ねてみると、まだ土地になじめぬ姿が受け取れるのである。颯爽とした都会人の姿がうかび上がって来る。異郷の自然は厳しく人を拒んでいる。サングラスをかけてその眩しさ熱気をやわらげさせ受け入れるのである。やっと安心してあたりを眺めることができるのである。そこに作者の意志が働いている。土地に直接入って行くきっかけをつかめないうたのである。都会に生まれ育った身のこなしが浮き上がるのだ。

夏昏き顔さかしまに水辺老ゆ 伊藤 京子

高原の湖であろう。しんと澄んだ水に顔をうつしてみると、顔のくらさに驚いたのである。疲れともみえるやつれをそこに見つけたからである。木々に囲まれた湖水の暗さではない。晩夏の光のためでもない。そこはかたない自分の顔の衰えの翳を感じ取った愁いである。林火先生は「写真に徹して写真に到達しているといえるだろう」と述べている。写真を身上に佳吟を残していることは学ぶべきである。

— 昭和四十二年

雷雲の中へ山 襷 集 中 す 森田 旅舟

地味で堅実な作家としては珍しい、力強く堂々とした句である。「中へ……集中す」に躍動がある。意志的に山が動き集まっていくような感じである。入道雲がますます成長している動きのためであろう。その雲に山頂を埋めて山は立っている。幾条もの襷が蒼黒く麓へ走っている。真夏の一時の情景を簡略に叙し、力強い。

雛の夜をひと来てともし路傍仏 大川つとむ

路傍仏にろうそくを灯したのは老婆であろう。灯されることによって路傍仏が生き生きと親しみのあるものとなったのである。雛の夜にふさわしいあたたかさ、やさしみのある句である。この人の把握力の確かさ、透徹した観察には定評のあるところである。

さまよひて春泥と化す夜の墓 大川つとむ

作者自身墓となって、春泥の中をさまよっているのである。やがてこの墓は夜陰と春泥の中に消えてしまう。病床にあつて熱の中で見た幻であろうか。かなしい句である。墓の姿態をよく捉えている。物の核心を深く見据えた所から生まれる重量感もまたこの人の特色である。

酒も少しは飲む父なるぞ秋の夜は 大串 章

「故郷より吾子誕生の報至る。即ち一ト言」と前書がある。一人夜長を酌んでいたのであろう。そこに女兒誕生の報がまい込んだ。父となったよろこび、こそばゆさにまた祝杯をあげたのであろう。そのうれしさにじっとしていらぬ気持ちだが、まだ見ぬ子へ語りかけずにはいらぬ衝動となつてわき上がる。牧水の秋夜と酒とのかかわりをふまえ、今しずかに酌んでいる自分をそのままに子どもに語りかけている。やさしいまなざし、満ちたりた心情がよく出ている。

われ去らば夜がおほふべし白牡丹 佐野 美智

昭和三十九年七月の交通事故を機に会社をやめてからの俳句への情熱は執念とも思われるほどに燃え上がった。やさしみのある句である。牡丹への愛着の深さが出ている。女性の艶を感じさせる。

時雨るるや金泥襖虚をかこみ 納 漠の夢

関西吟行会が宇治万福寺で開かれた時のものである。「虚をかこみ」がこの句のポイントである。寺院の人氣のない奥座敷、古びた金泥襖が囲っているものは、しんと冷えた暗闇である。空虚さを受け取って作者もまたひややかな気分になつて立っているのである。旅先で得た秀吟である。

(関森勝夫)

——昭和四十三年

短日の灯せば虹も遠きものに 金子無患子

作者の鳥取時代も終りの頃の作品。部屋のうちそとの明暗をとらえて、雪の早い山陰に住む作者のわびしさにじみ、余情となつてただよっている。鳥取へ移った当座の氏は、土地の風物を属目するに忙しかったが、二年も経ったこの句になると、さすがに読む者にしみじみと訴えてくる落ち着きをもっている。その土地に落ち着き、なじんだ結果が言外に嘆きとなつてあらわれてもそれはいたしかたないであろう。土地の風物に取材した句もさることながら、むしろ

る作者がふと洩らしたこの句の感懷に、わたしは風土の投影を色濃くみる。

鳥雲に恋得て残る季節工 勝亦 年男

「季節工」は農閑期出稼ぎの臨時工。その一人が出稼ぎ先で恋を得てとどまることになったというのである。一篇の小説を圧縮した趣の句だ。「鳥雲に」が利いており、渡りの季節に一羽とりのこされた鳥のあわれさをこの季節工に覚える。この恋、行くすえどうなるか心もとない思いにも誘われるが、読後ほのぼのとしたあたたかみがこののは、作者の人情が一句をつつんでいるからであろう。作者は富士市で印刷工場を営んでいるが、庶民性に発する人情が、この人の作品にはどれも流れており、ひとつの持ち味となっている。

ひとりの米膝つき計る夕立に 佐野 美智

詠われているのは女ひとり世帯のつましい日常のひと餉だが、つましいなりにすがすがしい。この句、初期から一貫して作者が真摯に生地を語りつづけている作品のひとつである。またこの作者は、初期にはなやかな出発をもたず、たゆまぬ歩みの積み重ねの上に開花をまっただ作家であるが、その根底には、自分をみつめてきた真摯さと持続があったことを読者は忘れ

てはなるまい。

柚子匂ふこの子何時まで背洗はす 永井 正夫

昭和四十三年は永井正夫・甲斐虎童・町田しげきの三氏が話題を占めた。三氏共通していることは、晩学の新人ということである。正夫氏を例にとれば、本州製紙富士工場に製造部長として赴任、そこで俳句と機縁をもたれた。虎童・しげき両氏にしても年齢五十にちかく、一方に社会的に責任のある多忙な時間を持っているという事情はおなじである。三氏の擡頭は、わたしたちに俳句への情熱に年齢、閑忙のへだてのないことを改めて教え、かつ励ますものがあった。正夫氏の作品は三氏のなかでもっとも素朴、人柄をじかに感じさせるあたたか味をもつ。「柚子匂ふ」の句は、そういった氏の面目を端的に読む者に伝えてくれる作品である。

忍の字の刃は刃のごとし時雨るる中 甲斐 虎童

「後水尾上皇の御宸筆を前に」の前書がある。京都岩倉実相院での作。虎童氏の作品は把握が対象に即して正確で鋭い。この句の「刃は刃のごとし」もいかにも鋭い。鋭いばかりでなく深い。徳川幕府の圧迫に耐えぬかれた上皇の御心まで捉えているからである。このような把握を

こそ、観入というべきであろう。

裾野包み 邯鄲包み 霧月夜 町田しげき

那須高原の作。しげき氏の作品は、前二者とことなり繊細かつ流麗である。三者晩学の新人では共通するが持ち味はことなる。このあたり、有季定型のなかでのびのびと個性を育てている「濱」作品の多様性の縮図を見る思いがする。この句、「裾野包み」のおおらかさと「邯鄲包み」の細やかな思いやりが、霧月夜のやわらかな雰囲氣を得て照應、よくとけ合つて美しい。ナイーヴな感受性はこの作家の身上であり、作品にみずみずしさを添わせている。

流木に 蹤き鳥 翔くる 盆の海 田中 螺石

この「盆の海」、暗い荒涼とした海原を思わせる。決してやすらかな海ではない。林火先生は、「この句には修羅界の相がある」と評されている。この鳥に、妄執じみた姿を覚えられたからであろう。流木も海も、その妄執に支配されて暗澹としているのだ。背後に作者の人生觀がのぞいているようにわたしは思う。

吹雪く 夜は 十二支土鈴 寄りあへり 下田 稔

飛驒高山の町はずれに、土雛をつくっている岩さんという方のお宅がある。十二支土鈴は、それぞれの生き物をかたどった素朴なかわい土鈴で土雛とおなじ窯で焼かれていた。この句、何よりも十二支土鈴の可憐さをいいとめている。とともに、その可憐な素朴さを通して作者がみつめているものは、炉端に身を寄せ合い吹雪の夜々を過ごす飛驒の人々のくらしであろう。その心情であろう。さらにいえば、遠い昔にまでつながる心情の典型であろう。典型をとらえたから可憐な十二支土鈴に転化し象徴化することができたのだ。風土性もまた人間性に立脚するものであり、このような作品を経て、風土性は「濱」にしっかりと根をおろしたと考えたい。

闘うて 鷹の ゑぐりし 深雪 なり 村越 化石

この句にわたしたちが覚えるのは作者の激しい気魄だ。深雪に一条のこる傷あとの直截な把握には、作者の氣息が充溢している。間髪を入れぬ把握であり、緊張した精神でないとかなわぬ把握だ。格調また正しく、昂揚した精神の響きを伝えている。

荒々しき神事ひかへて田を打てり

小山 梧雨

諏訪鍛錬会の作。この「荒々しき神事」は諏訪大社の御柱祭のこと。祭神建御名方はとくに気性のはげしい神といわれ、七年ごとの御柱曳きは死傷者が絶えないという。荒神に仕え、黙々と田を打っている諏訪人の姿がこの句から目にうかぶ。それは、むかしながらの姿であるのだ。

位して仙丈白し夕ざくら

荒井 正隆

作者は高遠まで足をのばしてこの句を得ている。仙丈は仙丈岳のこと。伊那の谷々を埋めて暮れて行くさくらの上に、仙丈は残雪白くなお浮かんでいるのである。「位して」に仙丈岳に対する、さらに自然に対する作者の敬虔な気持ちがかもっている。自然をただ美しくとらえたにとどまらず、読む者を深い感動にさそうのもそのためである。

鳥打を眼深に囀荷となしぬ

岡田 鉄

作者は東京の深川に住み、根っからの下町育ち。作者の興味は人間にひかれがちだが、この鳥屋師も作者にとらえられた人間のひとりである。鳥打帽を眼深にかぶったさまはどこか陰険でつめたく、囀かごを無造作に荷物として背負って行くさまは、職業ゆえとはいいいながら無慈悲なものだ。職業を通してその男の性格まで描いている。むろん、作者が小鳥を愛する側に立つこと、いうまでもない。下町の人情だ。

——昭和四十四年

句雲水炉に招ぜられかしこまる

大石 白夢

「飄然と吟行し、寺あれば即ち乞うて憩ふ。正に俳句雲水ともいふべきかと洞然氏と笑ひあふ。」の前書がある。洞然氏とは清水の羽部洞然氏のこと。おなじ清水の飯森杉雨氏を加えて静岡の三長老と呼ぶ。三氏打ち揃って出掛けられることが多い。杉雨氏が加わったとしてもこの句の情景は変わらぬ。三氏ともに相当なご年配だがなおお元気でたのもしい。この句、白夢氏の飄々とした人柄が実によく出ている。最近とみに自在を得、持ち味を存分に發揮した句を作られている。

藁仕事なくなりし父手が老ゆる

内館 曉青

作者は岩手県の宮古に住み、牛を誂い、稲刈りを詠ってきた生粋の農作家である。この「藁仕事なくなりし」は時代の変遷が奪い去ったものであろう。生き甲斐をひとつひとつ奪われて行くように老けこんで行く父なのだ。「手が老ゆる」は鋭い把握である。この鋭さには、実際に農業に生きその変遷をつぶさに体験した者でなければ得られない実感がこもっており、その点が貴重だ。「濱」に農作家が乏しくなりつつあるとき、この作者の仕事自体もまた貴重というべきであらう。

鵜の貌の公卿めくといふ鵜匠こそ 三浦 紀水

「鵜の貌を公卿めくといふ」は鵜匠の語ったそのままの言葉に発想を求めている。この鵜匠の言葉には鵜に対する愛情と長い伝統に仕える者の誇りがある。そういう鵜匠をみて、鵜匠こそ公卿のように端正だと作者はいうのである。鵜飼の歴史は古いが、長良川の鵜飼のみ皇室の保護あつて今日まで残っているという。世襲の業であらう。鵜匠にも鵜にも純血が流れているのだ。その洗練された美しさが「公卿めく」である。鵜飼のきらびやかな情景や生き物の鵜を

詠んだ句は多からう。しかし鵜飼に流れる伝統の純血そのものに目を向け、しかも美しく詠いあげた作品はこの句を措いてほかに知らない。

休む間も刃は近寄せて 冬木 樵 鳴戸 海峡

この句には根性のすわった作家の目が光っている。この目を見逃して氏を語ってはいけない。氏にはながい俳歴がある。俳句の上でもわたしなどよりはるかに先輩だ。この句は、氏がそういう俳歴を捨ててものにじかに即こうとしているきびしさを教えている。「刃は近寄せて」が目であり、冬木樵のきびしい姿と、見据える作者の目は四つに組んで隙がない。

濤音のつまりて熟るる能登南瓜 恩田 甲

具象化のたしかな作品である。この完璧な具象化は、一にも二にも「濤音のつまりて」という見事な把握にかかる。林火先生は、この句に過疎集落を想像されている。たしかに、この句の透明な空間は人を近寄せない。過疎という現象、人間と自然の鋭い接点として詠いたい衝動にかられる題材だが、具体的にいいとめるのはむずかしい。この句は言外に過疎現象を想像させて成功している。

鈴虫の壺抱く水汲女にあらず 保田 てい

作者は相当の年配ときくが一句に流れる情感は清らかでみずみずしい。この句から、わたしは青木繁描くところの「わだつみのいろこの宮」を想像した。神秘的な画面に流れる抒情とひびき合う清々しさをおぼえるからである。

浜の蛾の流灯を追ひかへらざる 中川 美亀

この蛾に作者が見たものは、執念にほろぶものの空しさであらうか。そこまでは割り切っていない。割り切っていたらもつとつまらなくなっていたらう。不気味さも消えたらう。作者はこの蛾は帰れないとみたのだ。感動をもつてみたから、それは真実となったのだ。感動の核心に焼きついたからこの蛾は不気味に、そしてあわれな生命を得たのだ。それにしても、黄泉の国からの誘いに酔っているような蛾であり、暗示に富んでいる。

落されて水の遍歴はじまれり 水口 郁子

田んぼの落し水である。落口を出て水そのものの自在をとりもどし旅路につくのである。どこへ流れて行くのか作者も知らぬ。それを「水の遍歴はじまれり」と見たのだ。含蓄に富んだ見方だ。この遍歴に人生行路を重ね合わせて鑑賞することもできようが、それほど深刻なものでもあるまい。ちよろちよろとはしり出る水音は、むしろ自在を得た喜びのように響く。一句のリズムも軽快で、観念的ともいえる内容を巧みな言葉の斡旋で処理している。

——昭和四十五年

静かに身を養ふに似て三日過ぐ 松崎鉄之介

鉄之介氏の作品では、やはり句集『歩行者』の作品が一番印象にのこっているが、この句をみるとこの間の歳月がしずかな力となって溢れ出ようとしている姿を思わないわけにはいかない。氏の歩行者たる面目をあらためて知らされる思いである。壮年の決意をうながす充実が、楽な呼吸ながらこの句にきかれる。

宙に鍬光る耕しの深からむ 中戸川朝人

春光遍満するなかに一耕人のふりあげる鍬がきらりと光る。そのひかりに作者は耕しの深いことを読みとっている。「深からむ」の推量は情景の解釈であり、その解釈のなかに朝人の世界が生まれている。よし実景が山間の寒村であつたにせよ、鍬のきらめきを得た作者は、その耕人を心ゆたかに描いたにちがいない。氏の作品には、一貫して人生肯定の精神がかがやくが、それは観念として語られているのではない。作者の血脈と対象がとけ合い、一句一句に形象化されている。この句の耕人も作者と血肉を頒っている。ゆつくりと、しかし確実な耕しのリズムは、そのまま作者の精神のリズムを如実に伝えている。

炭 負 う て 人 温 通 ふ 道 一 本 田 中 菅 子

冬枯れの山中を炭負が一人辿っている。炭負が行くかぎりそのみちには人間のぬくみを通い、一本の糸のようなみちが山中にほのほのと息づく。冬山のきびしいたたずまいが、一人の炭負をゆるしてわずかに息をゆるめた様がある。炭負はみずからの体温をもつてみちを切り拓いて行くのである。人間のあたたかみが、自然のきびしさのなかにかなしみとなつて沁みわたっている句だ。しらじらとした一本の道が読後目にうかぶ。作者が見据えた道だから読む者の目にもうかぶのだ。そこまで真正面から取り組んで見据えたということ、新人らしいいきよい力を覚える。

烽 火 山 南 北 に 立 つ 畑 起 す 下 田 稔

こののろし山、現実には富上川沿いの身延線沿線にある。武田勢が甲斐への通信に利用したものといるが、「南北に立つ」は地勢上もそのとおりである。この句には悠久感がある。土を耕し作物を育て、そして刈りとるという営みは、この土地に絶えることなくつづいているのだ。悠久感とは、土地、歴史、生活を一体にとらえたことに発している。しかも、のろし山だけにどこかのどかである。「南北」も親しみを生む。実際の情景に即しているからそれぞれ無理がなく、しかもものびのびと一句に生きている。それは何よりも作者がおおらかにその土地を受け入れているからである。人間を理解するように土地を理解すること、このおおらかさがなくてはかなうまい。

肩 に 髪 あ ふ ら せ 冬 の 女 学 院 上 野 さ ち 子

作者は、山口女子短大国文学科助教授。この女学院は当然作者が教鞭をとる女子短大である。この句、「冬」がよい。色彩を覚えさせない清潔さがある。そのなかに、若い黒髪のみが生きて生きた句なのだ。「髪あふらせ」ているのは学生だが、女学院いっばいに髪があふれてい

るような錯覚に読後おちいる。きよらかでゆたか、そして若々しい句だ。

蜻蛉澄み 天気図の晴れ 北京まで 千賀 静子

さわやかな句だ。高気圧は大陸から張り出し、天気図の等圧線は安定した晴天を約束している。この句、「北京」が目だ。大陸の澄んだ大空と、蜻蛉のうかぶこの青空が通じているという解放感、それを具体的に訴えているのが「北京」の語だ。わたしがこの句から一番印象づけられたことは、大陸への親近感だ。「北京まで」といえる親しさだ。戦後大陸は遠くなったが、国と国との公の場はそれとして、ひとりひとりの人間の中に、大陸へ親しく呼びかける感情が生きているという事実だ。それは私事かもしれない。しかし無視できない。作者がかつて北京に住んだことがあるかどうか、わたしは知らないが、そんなことも偲ばれる句だ。

菊日 和賜はるも 母片隅に 伊奈 秀典

「拳式」の前書がある。作者本人の結婚式であること、いうまでもない。わが子の栄えの日も、母はつつましく片隅にひかえているというのだ。この母、作者の母君であるとともに、日本のすべての母の姿でもあろう。この句、素直におだやかに詠いあげているが、作者の感動のいち

ばん深いところから発している句だ。作者はまだ二十代の若きだが句に何のてらいもなく読んで気持ちよいのは、そこなわれぬ若さのたまものであろう。このように母を詠い得た作者の幸福を羨ましいとも思う。

就職列車発つ「東京の塵になるな」 山崎和賀流

作者は岩手の湯田町に住む。年齢は三十を少し出たばかり。名実ともに新しい力を「濱」にもたらしている。この句、「東京の塵になるな」は、自ら持つものを持っている者のみがいえる励ましの言葉だ。みちのくに住む者の根性がいわせた言葉だ。素朴だが力強い人間讃歌だ。人間の回復、おおらかさの回復は、ここに立派な芽をみせている。

(宮津昭彦)